

平成十七年度 中学校第一回入学考査問題 (国語)

注意 解答はすべて解答用紙に記入すること。また、字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。

海 1、次の前書きとそれに続く小説を眺み、後の問いに答えなさい。なお、本文には省略部分がある。

七歳のトオルは、最近少年野球チームに入ったばかり、すっかり野球に夢中である。試合に出てホームランを打とうと、トオルは毎日遅くまで奮振りをしてきた。父親のミツルも、ミツルの職場の先輩である善さんも野球が大好きだ。トオルの母親は、トオルがまだ赤ん坊のころに亡くなった。そして、サチコは、ミツル・トオル父子との二年間の交際を経て、近々ミツルと再婚することになっている。さて、次の場面は、トオルと善さんがキャッチボールをした日の夕飯後のことである。

トオルが寝た後、ミツルと善さんは焼酎を飲みはじめた。

「善さん、トオル君は名選手になれそうですか？」

サチコが諸の肴物を盛った皿を出しながら訊いた。

善さんは膝をひとつ口に入れて、美味い、と唸ってサチコの顔をじっと見た。

〈中略〉

「トオル君の頭が変わったのがわかるかい？」

「トオル君の頭が」

「そうだと。チームに入る前と今ではトオル君の顔は違っている。私に言わせると男らしい目になっている。そっきサッチャンはトオル君が名選手になれるかどうか訊いただろう。野球をする目的は名選手になることなんかじゃないんだ。野球の、あのボールには皆のこころが込められているんだ」

そう言っ善さんは油がしみついた指先で胸をさしめした。

「そうだよな、ミツル」

「うん、そうです。青空に舞い上がったボールには俺の夢も込められてるし」

「……………」

サチコは笑い合っている二人の顔を交互に見た。

「名選手になったり、プロ野球選手になることが目的で野球をしないでいいんだよ。勝つことだけが目的なら野球なんてつまらないものだ。一生懸命にボールにむかっていくことが誰かのためになっているのが素晴らしいんだ。トオル君もやがてそれがわかる時がある。皆が見ているボールには、皆のこころが一緒に飛んだり弾んだりしているんだ。ユニホームを着てスクラウトに立つのは、それを身体でおぼえることなんだ」

サチコには善さんの話す言葉のすべては理解できなかつたが、男たちが野球に夢中になる理由が、彼女が考えていた野球とは別のところにあるような気持ちかしてきた。

〈中略〉

翌夕、トオルは(1)を落して帰ってきた。

オヤツのパンケーキが食卓の上に置いてあると言っても生返事をするだけだった。

「まあ早くユニホームを脱いで着換えてきなさい」

「ねえ、善さんの家にいつてきていい」

「ため。今日打てなかつたからでしょう。善さんにまだ教えてもらおうの？ 善さんが居れば打てるんじゃないよ。トオル君が自分で打つんだから。じゃ今日私が一緒に練習しておける」

「えっ、サッチャンが」

「そいよ。こう見えてもソフトボール大会でホームランを打つたこともあるんだから。そのかわり今夜は駄前でハンバーガーだよ」

「うん、その方が好きなもの」

一人は空池に行き練習をはじめた。思っただけより不器用な子だった。トオルはミツルの運動音痴の血を引いたのか、サチコの目から見ても運動神経が鈍いように思えた。それでも何度も繰り返してサチコがボールを投げてやると打球は少しずつバットの芯に当たるようになっていった。そう、その感じだよ、トオル君、いぞ。日が暮れるまで二人は練習を続けた。

境

駅前のハンバトガイシヨップに二人して車で出かけた。河原の堤で花見をしながら食べることにした。堤に墮ると川風が心地良かった。対岸に咲く桜の花に照明が当たり、絹の衣が揺れているようだった。

「ねえ、どうしてそんなにホーラムランが打ちたいの？」

「……………」

トオルは何も答えなかった。善き人には話せても自分には話してくれないことがサチコは少し淋しい気がした。³トオルはハンバトガイを手に持ったまま対岸をじっと見ていた。

「ねえ、秘密を守るって約束してくれる？」

「秘密？ うん、守るって約束するわ」

「実は三人で約束したんだ」

「三人って？」

「ソウ君と、ソウ君のおねえさん」

「友達なの？」

「うん。サッチャンのお母さんが家に来た日にクワンソウの草の中で人形を見つけたんだよ。綺麗な青いガラスの人形で……………」

トオルはこの二週間に起った奇妙な出逢いをすべて話してくれた。

その話を聞いてサチコは驚いた。人形を交番に届けたトオルの姿は目に浮かんだが、少女がその人形を探しに交番にあらわれ、少女がトオルに逢いにきて彼女の弟と知り合いになったことが偶然過ぎるように思えた。

「それで、その、ソウ君に逢いに病院までトオル君は行ったの？」

「そうだよ。ソウ君は今、外に出られないってソウ君のおねえさんが言ったから」

「ソウ君は構気なの？」

「うん、手柄をするんだって。でも元氣そうだったよ。ソウ君の部屋の窓からぼくらのクワンソウ見えるんだ。ソウ君は野球が大好きなんだ。ほく一度、練習の時、監督さんに内緒でクワンソウから手を振ったことがあるんだ」

「ソウ君も手を振ってたの？」

「いや過ぎてわからなかった」

窓辺に立ってクワンソウを見つめる少年の姿が浮かんだ。

「……………」それだ。それでホーラムランを打つ約束をしたんだ」

トオルはくりとくさずいて小（②）をかしげた。

「どうしたの？」

「ソウ君のおねえさんが約束は三人の秘密にしようって言ったんだ。それを話してしまつたから……………」

「大丈夫よ。私とトオル君の秘密にしておくから。ソウ君のおねえさんに逢つてもトオル君から話を聞いたなんて言わないで……」

「い」

「でも……………」

トオルは少し後悔しているようだった。

「そのかわりトオル君がホーラムランを打つても私が一緒に練習したからよって言わない」

トオルがサチコを見た。サチコは（③）に皺を寄せるようにして笑い、小指を出した。その指にトオルが小指をかけた。指切りケンミン、二人は（ ）言つて顔をつけた。

次の日も二人は空地で練習をした。

「明日は試合だね。頑張つてよ。今日の練習の感じだと打てると思うな」

「そうかな……………」

「ソウ君のためでしょう。自信持たなきゃ」

「うん」 〈中略〉

食事が終わつて二人は一緒に風呂に入った。トオルの身体を洗っているとき差し出した両手の指の付け根が赤くなつていた。小さななるほど感にバットを握っていたのかと思うとサチコはせつなくなつた。身体を洗い終えて二人は湯舟に入った。背後からトオルの身体を抱くと水の中で抱いたせいでではなく、その重みにやほり子供なのだと思つた。その軽さが、友

達のために懸命になつているトオルを余計にいとおしく思わせた。

「ソウ君の病氣早く良くなるよ。」

「うん。ぼくがホームランを打てばきつとよくなるよ。そう思うんだ。」

「そうね……。ねぇ、ソウ君の人形はどうしてグラウンドに落ちてたの？」

「それはね、ソウ君が看護婦さんと堤に散歩へいった日に、しばらく散歩ができないうつて言われたんだ。だからくやし

くなつて大切な人形を投げつけたんだよ。」

「そだったんだ。」

「可哀相ね、外に出られないなんて……。」

その言葉をサチコは胸の中に仕舞った。人形を堤の上から投げつける少年の姿が浮かんだ。少年の病氣が騒いものではな

いことがサチコにはわかった。

〈中略〉

春が終ろうとしていた。

トオルはまだホームランを打てない。それでも先週、年少チームのゲームで生まれて初めて二塁打を打った。その話を聞

くミツルも善き人も自分のことのように喜んでた。

「二塁打を打った日の夕暮れ、トオルはサチコに訊いた。

「ボクの二塁打をソウ君は見えてくれたかな？ お姉ちゃんもきてくれなさい……。」

真剣なまなざしでサチコを見るトオルに彼女は答えた。

「きつと見てくれるわよ。ちゃんと聞いてるわ。」

サチコは姉弟のことをミツルには話さなかつた。

その日はミツルのひさしなりの休日だつた。

夕暮れ、三人は河畔まで散歩に出かけた。グロリアを手にした父と子がサチコの前を歩いてた。風の薫りに夏の氣配が

する。堤に出ると、ミツルとトオルがグラウンドに駆け下りて、キャッチボールをはじめた。サチコは堤の傾斜に座つた。

春先よりトオルの投げるボールは力強くなつてた。それに比べるとミツルの投げ方は相変わらずきつちなかつた。二人は

懸命にボールを投げていた。

「不用な方が上達かわかるのか……。」

サチコはそんなことを思いながら、二人の姿を見ていた。父と子のむこうに何面かのグラウンドがひろがり、芝が青々と

染まり出していた。グラウンドのむこうに病院の建物が見えた。サチコは(④)を細めて病室の窓を見たが、彼女の場

所からは人影など確認できなかつた。先月、サチコは病院に勤める友達にソウ君のことを聞こうと思つたが、たしかめるの

をためた。大切なことは貴空に舞い上がったボールを、皆の思いの込めたボールを、見上げていくことだと思つた。

ミツルの投げたボールがサチコの居る方に飛んできた。何をしてんだか、と思つてサチコがボールを拾おうと立ち上

がつた時、トオルの声がした。

「ゴ、ボールを取つてよ。」

サチコは思わずトオルを見た。トオルが笑つてボールの転がつた方を指さしていた。サチコは斜面をゆつくりと下りると

ボールを拾ひトオルにむかつて投げようとした。数メートル先にはいる數字の姿がぼんやりとにじんだ。

(伊集院静「ぼくのボールが君に届けば」(講談社))

問一 文中の(①)～(④)には「頭」とか「足」というような、からだの一部を表わすことばが入る。それぞ

れ漢字または平仮名で書きなさい。ただし、同じ語は二度使わない。

問二 部一「野球をする目的は……」が込められているんだ」とあるが、善き人の考える「野球」とはどういうものか。

五十字以上、六十字以内で説明しなさい。

問三 部二「どうしてそんなにホームランが打りたいの？」とあるが、トオルはなぜホームランにこだわっているのか。

その理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もし野球が大好きなソウ君のためにホームランが打てたら、ソウ君も手術を受ける決心をしってくれると考えたから。

イ 野球が大好きなのに外に出られないソウ君のために、病院にいるソウ君まで届くようなホームランを打たいから。

ウ 野球を始めたいのにホームランを打つという奇蹟でも起きないと、ソウ君の病氣はよくなるまいと考えたから。

エ ホームランを打ちたかっただのに野球ができなくなったソウ君の代わりに試合に出て、ソウ君の分まで活躍したいから。

海城

問四 ―部3― トオルはハンバ―ガーをいじって見ていた」とあるが、この時のトオルの気持ちとして適当なものを次から一選び、記号で答えなさい。

ア サチコが何と自分のことを知りたがりいろいろ質問することを、ありがたくは思うが、うるさくも感じている。
イ どうしたら早くホームランを打つことができるかとばかり考えていて、サチコの言葉も耳に入らない。
ウ ソウ君との約束の大切さを思い、練習をきき合ってくれたとはいえず、サチコに話してしまつてよいものか迷っている。
エ 野球の練習を通してサチコと心を通わすことができ、幸せな気分になり対岸の桜にうつとりと見とれている。

問五 本文中のトオル、ソウ君、その姉の関係をとして適当なものを次から一選び、記号で答えなさい。
ア グラウンドで拾った人形を交番に届けたことから、トオルは人形の礼を言いに来た少女と知り合いになる。そして彼女の弟で入院中のソウ君を見舞つたトオルは、ソウ君のためにホームランを打つ約束をした。
イ グラウンドで拾った人形を、持ち主のソウ君に届けてあげたことから、トオルは入院中のソウ君と知り合いになる。そしてその姉の願いに応じて、ソウ君のためにホームランを打つ約束をした。
ウ 姉が落とした人形を交番に届けてあげたことから、いつも病院の窓からグラウンドの練習を見ているソウ君とトオルは知り合いになった。そしてソウ君のためにホームランを打つ約束をした。
エ トオルは友達の女の子から弟が入院していることを聞き、見舞いに行つた。そして自分がグラウンドで拾った人形はソウ君が投げ捨てたものだとして知り、ソウ君のためにホームランを打つ約束をした。

問六 ―部4― 「そのかわりいって言わない」の「言わない」を朗読するとしたら、どのような調子で読めばよいか。適当なものを次から一選び、記号で答えなさい。

ア 「そんなことしないなね」と不安におそれるように。
イ 「絶対そんなことしてはいけない」と自分の気持ちに反するように。
ウ 「絶対そんなことしないな」と提案するように。
エ 「そうした方がいのかしら」と問いかけるように。
問七 文中の〈 〉に入る言葉とその説明として適当なものを次から一選び、記号で答えなさい。

ア 「笑いながら」で、あまり深く考えないようにしようとする様子を表す。
イ 「大きな声」で、これから二人でがんばつていこうと気合を入れている様子を表す。
ウ 「つぶやくように」で、本当に二人で秘密を守つていけるか心配している様子を表す。
エ 「きやくように」で、二人だけの秘密を大切に守ろうとするような様子を表す。
問八 ―部5― 「ちゃんと届いてるわ」とあるが、それはどういうことを言っているか。その説明として適当なものを次から一選び、記号で答えなさい。

ア トオルの二塁打は、ソウ君の病気が早くよくなるようにと願つて懸命に打つたものだというときは、たとえそれがホームランでなくても伝わつていくはずだということ。
イ トオルがソウ君のために懸命に二塁打を打つたということは、たとえソウ君が見ていなくても、ソウ君のおねえさんが必ず伝えていくはずだということ。
ウ トオルが二塁打を打つたときにわきあがつた喚声は、ホームランでなくてもそれに負けないくらい大きく、トオルの活躍ぶりは十分に届いているはずだということ。
エ トオルが生まれて初めて二塁打を打つた記念のホームランは、ホームランではなかったものの、トオルの希望通りに全うソウ君の手元に届けられているはずだということ。

問九 ―部6― 「サチコは、たしかめるのをやめた」とあるが、その理由として適当なものを次から一選び、記号で答えなさい。

ア ソウ君の病状を知つたところで病気を直すことはできないので、せめてトオルの気がすむまで、トオルの練習につき会おうと思つたから。
イ ソウ君の病状を具体的に知ることよりも、トオルと一緒にソウ君がよくなることを祈り、トオルの願いを見守ることが大切だと思つたから。
ウ ソウ君の病状をたしかめれば、トオルの願いがかなわぬ現実を知ることになり、そのことをトオルにどう言えばよいか分からなかつたから。
エ ソウ君の病状を聞いても教えてくれるはずがなく、むだなことをせずに、トオルと一緒にホームランを追いかけける生活を大切にしようと思つたから。

③『シド』文化研究者の上笠一郎さんによると、武士の教育と言っても、それまでの実戦に対応するための武術教育は、子どもで、支配階級の一員として武術のみでなく、いわゆる読み・書き・算盤を覚える必要があり、学校ができたわけですが、

もにとつては遊び的要素が感じられたのに、文字教育になって、大部分の子どもには苦痛になっていったらうというところで、しかも武術の時は、大人を真似て、自分で練習する、いわゆる「学習」が主であつたのに、読み書きは教え授けられるものにならざるをえず、子どもにとつては遊びの部分は消え、労働的になっていったというわけです。今の子どもたちの学校と重ね合わせるとよくわかります。体がムズムズするのには、じつと机の前に坐つて難しいことを聞かされるつらさは、江戸時代から続いていたのですな。

一方、農・工・商、つまり労働者の社会では、労働・教育・遊びは一体化してしまつた。子どもも苗運びや草刈り、弟妹の子守、時には子守奉公や丁稚奉公がありなかなかに大変なつたのです。△中略△ 農繁期、農閑期というようなりズムのある、また四季の変化を直接感じることのできる労働と遊びの連続した生活が子どもたちの中にあつた——これは、第二次大戦後の高度経済成長の時まで続いていた姿でした。

江戸時代のもう一つの身分である商、身分としては最低の位置に置かれていましたが、江戸の文化を作つたのはこの人だであつたわけで、その子どもたちも、まずは寺子屋で教育を受け、都会の中で出始めた玩具や絵本も楽しむ、私たちが今思い描く子どもらしい生活をしていたことになりました。そして明治になります。ここから、現在の私たちの生活の基本となる、義務教育と資本主義の中で労働、遊びを暇つぶしと見る「カチカチ」などが生れてくるわけです。

そして今、科学技術時代と言われる中での子どもの労働、学習、遊びはどうなつていくか。今でもこれらが、人間生活の基本であることは変わりありませんから、これが子どもの中でどのような姿で存在し、どのように大人になつていくか。それが、子どもを考へるにあつて、重要な一つの「シズン」になるでしょう。とくにここで大切だと思つるのは、学習と教育となつていくところだ。

生きものとしての子どもの特徴は、大きな脳を用い、⁴学習によって柔軟性を獲得することです。他の生きものが、ほとんど本能に従つて生きていくのに比べて、人間は、学び、新しいものを生み出していきます。労働も遊びも学習のうちになり立つわけですが、単なる学習では不足なつてきたところに教育が登場しました。教育が学習とイコールで結ばれるなら問題はありませんが、そうはなつていません。現代社会の教育の中心である学校という場所は、自ら学ぶというよりは知識を教えこむところになつていきます。そのうえに、科学技術時代は、労働も遊びも娯楽も兼ねますから、これらが生きものとしての三要素になつていくのかどうかさえわからなくなつてきています。

学習でなく教育が子どもの生活の中の大きなウエイトを占めることになつたこと、しかもその教育がほとんど制度化していったことは、⁵生きものとしての人間を見ていく私にとつては、大きな問題に見えます。どこに基準をとるかということ考へた時に、思わず「やがまし村」の子どもたちを選んだ最大の理由は、どうも彼らの中で、学習、遊び、労働が一体化しているのを見ると見えたからだらうです。この問題の重要性を感じていたのであらうと思つています。

④ 三ツクロナ：「クロナ」とは、アイスランドのお金の単位。ノウハウ：知識と技術。ウエイト：重み。

問一 ～ 部①～⑤のカクカナを漢字に直しなさい。

問一 文中の(1)～(4)には、ア「労働」、イ「教育」、ウ「遊び」のどれかが入る。適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

問三 一部1「楽しいお手伝い」とあるが、ここの「お手伝い」に楽しさがともなつてい理由を二十字以上、二十五字以内で説明しなさい。

問四 一部2「六人」とあるが、ものなどを教えるときにはどのように単位をつける。では、次のような場合はどんな単位をつけるのが正しいか。それぞれあとから選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使つてはいけない。

- ① スーパーマーケットでお弁当を買つたら、店員さんに「お箸はなん() ありますか」と聞かれました。
② 今晚の湯豆腐には、豆腐を二() 入れました。
③ 私が住んでいるマンションにはエレベーターが全部で三() ついています。
④ テザートに、たわな葡萄が一人に一() つついていてます。
⑤ 今年の小説のベストセラーは年間五十万() 発行された本に決まりました。

ア 丁 1冊 ウ 房 エ 本 オ 粒
カ 部 キ 個 ク 枚 ケ 膳 コ 基
問五 1部 3「これが江戸時代になると少し違ってきています」とあるが、江戸時代以後、武士の場合はどのような変化が起きたか。次の表の(1)～(4)に入る言葉を1部の段落からぬき出して答えなさい。

	江戸時代以前	江戸時代以後
子どもが教わる内容	武術	武術・読み・書き・算盤
子どもが教わる時の場所	道場など実戦的な場所	(1)
子どもが教わる時の形態	武術の「学習」を中心にして(2)の部分がある。	武術と文字の「(3)」を中心にして労働的で(4)をともなう。

問六 1部 4「学習によって柔軟性を獲得する」とあるが、具体的にどのようなことが考えられるか。次から不適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いくつかの自然災害の経験を踏まえて、より安全な都市計画を立案していくこと。
 - イ 父に習った釣りのしかけをねらう魚に合わせ工夫して変えること。
 - ウ 本場インドのカレーも日本に伝わると、日本人の口に合わせて家庭料理となったこと。
 - エ 赤ちゃんや、泣き声をあけることで、お腹がすいていることをうたえること。
- 問七 1部 5「生きものとしての人間を、大きな問題に見えます」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 人の根本的なあり方は、脳を使い学習を行うことにあるが、教育に要領することによって学習が機能しなくなり、人間の本質も影響を受けるのではないかと心配だから。
 - イ 教育のウエイトがますます、知識をつめこむことだけが大切なこととなり、遊ぶこともできず、遊ばかりに関心が向いてしまうことが心配だから。
 - ウ 社会が科学技術を重んじ、科学的知識ばかりが教え込まれることにより子供のものの見方がかたよったものになってしまふのではないかと、知識をこめこむことだけが重要な意味を持つことになり、学校制度以外の学びの場がまったくなくなってしまうことが心配だから。

問八 本文の内容展開の説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者は、人間らしく生きる外国の子どもの楽しい生活を具体的に示しながら、日本の子どもたちにはそのような生活のなかつたことを歴史的に見ていく。そして、科学技術教育に将来の可能性を見出そうとしている日本社会のこれからに期待している。
- イ 筆者はまず外国の理想的な社会に生きる子供たちの生活を紹介する。そして、人間が生きていくためには絶対必要な要素を育ててこなかつた日本の歴史に注目し、将来のためにも、日本の社会に欠けている教育制度を充実させていくことの重要性を強調している。
- ウ 筆者はある村の生活を描きながら、生き物としての人間にとっては何か必要であるかをまず説く。そして、その人間にとって必要な要素の性質がどのように変わっていくかを歴史的に見ていくことにより、これからの人間のありかたを心配している。
- エ 筆者は、現代人が物語の世界でしか人間が生きていくための要素を見いだせなかつた過程を歴史的にたどっていく。そして、いろいろな制度改革をしながらも、ついには科学技術の中に飲み込まれて行ってしまう人間の将来像を別の物語世界の中で描いている。